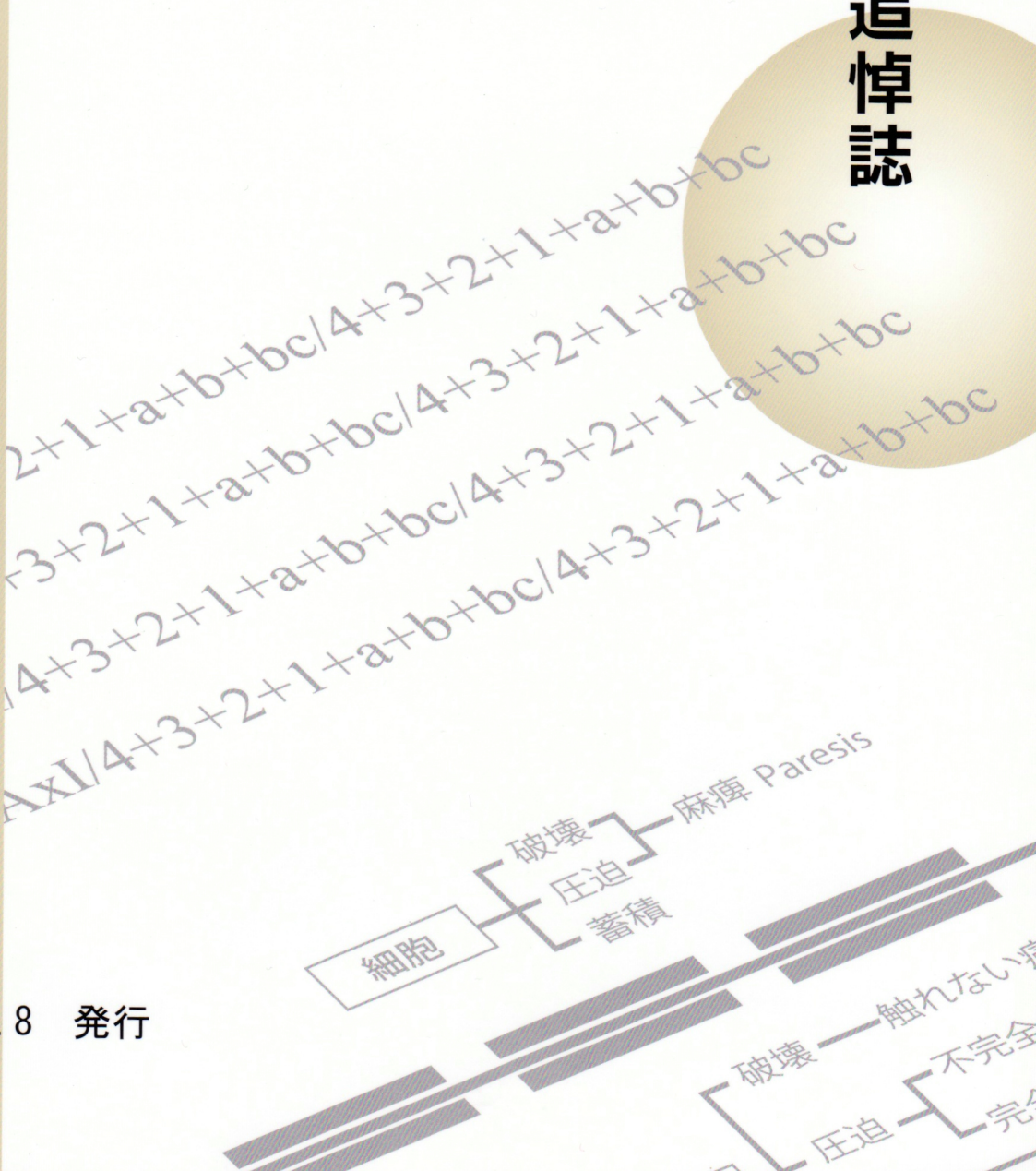
柯尚志先生　追悼誌



2016.5.8　発行

一般口演
演題 2

子宮頸癌ワクチン注射後副反応の遠絡的考え方の試み

小泉医院 遠絡医療センター　小泉正弘
遠絡医学講師 / 尚志塾士

緒言

子宮頸癌ワクチン注射後副反応については、最近、テレビや新聞で話題になっております。症状は複雑であり、未だに治療法がないのが現状です。今回、副反応と不随意運動について、遠絡的見解を加えながら考えていきたい。

子宮頸癌ワクチンと不随意運動について

子宮頸癌とは、子宮の入り口に発生する癌のこと。子宮頸癌は遺伝に関係なく、原因の大半は HPV ウイルス（ヒトパピローマウイルス）の感染によります。ウイルスは性交渉によって、人から人へ感染するとされています。20 代から 30 代女性の発症する癌の第一位を占めており、年間 3000 人が死亡します。
1976 年、ドイツ癌研究センターのハラルド・ツア・ハウゼン名誉教授は、HPV が子宮頸癌の原因であることを突き止め、1983 年、子宮頸癌の中に HPV16 型の DNA を発見、翌年、HPV18 型の DNA も発見しました。この研究結果を元に、2006 年には、子宮頸癌ワクチンが製造されました。

HPV ウイルスは、ヒトの乳頭のようなイボを形成することからこの名前が付けられました。性交渉などから、粘膜や皮膚に感染するウイルスです。ウイルスは 100 種類以上ありますが、発がん性の高いウイルスは 15 種類あります（HPV16.18.31.33.35.39.45.51.52.56.58.59.68.73.82 型）。その内、HPV16.18.52.58 型が高リスクウイルスとされています。

使用された子宮頸癌ワクチンは 2 種

類：2009年10月に承認された英・グラクソスミスクライン社の「サーバリックス」と2011年7月に承認された米・メルク社の「ガーダシル」があります。サーバリックスの有効成分のHPVウイルス蛋白質ウイルス粒子はイラクサギンウワバ（蛾）の細胞の遺伝子を組み替えて作成した蛋白質ウイルス粒子です。ガーダシルは酵母の遺伝子を組み替えて作成した蛋白質ウイルス粒子です。両者とも、長期間にわたって高抗体価を維持するために、免疫増強剤が必要となり、水酸化アルミニウム懸濁液が添加されました。

ワクチンは、HPVに既に感染している人には、効果がなく、また、同ウイルスの増殖を刺激すると言う報告があります。これらの理由により、性交渉をまだ経験していない、HPV感染前の小中高の女子学生を優先に接種対象としています。半年に3回接種することにより、最長6.4年間のHPVの感染防止に有効な抗体を作ることが出来ます。2013年4月定期接種として定められていましたが、副反応のため、2013年6月厚生労働省は接種推奨を中止しました。

厚生労働省が発表したHPVワクチン副反応（2013.3.31まで）は：局所反応として：関節痛、発赤、腫脹、蕁麻疹、発疹。全身反応として:頭痛、発熱、不眠、過眠、倦怠感、めまい、脱力感、局所疼痛、全身筋肉痛、重篤な副反応として：意識消失、失神寸前、アナフィラキシーショック、痙攣、ギラン・バレー症候群、急性散在性脳脊髄炎、全身性エリテマトーデス、複合性局所性疼痛症候群（CRPS）。

不随意運動として：振戦、ミオクローヌス、ジストニア、舞踏病のいずれか該当する、或は組み合わさった運動が見られます。

副反応に対する各専門家の見解

（1）厚生労働省の検討部会：

筋肉注射という針の傷みや医師の説明不足などからの心身の反応が原因と結論づけました。

（2）厚労省副反応・痛み研究チーム信州大医学部の池田修一教授：

起き上った時に立ちくらみやめまいなどの症状が起きる体位性頻脈症候群のHPVワクチン副反応の患者は、「心身の反応」や「自然発生的」なものでは説明できない。むしろ、ウイルス感染が先行しないと起こらない病態だと指摘しています。

また、池田教授は副反応の患者40人を調査し、29人に自律神経の異常を指摘されました。

①麻痺やけいれんが生じている患者の手足は温度(22.2℃)が健康な人(28.4℃)と比べて低い、自律神経の異常により、血流が悪くなっている可能性が高いこと

を指摘されました。

②正常の方の皮膚内の神経束はぴっちり整列しているが、神経が壊れると皮膚内の神経に白い部分、「むくみ」が多く観察されたことを発表しました。

(3) 国立精神・神経医療センター佐々木小児神経診療部部長：

ワクチン自体が身体に影響を与え、末梢神経、特に自律神経の問題を引き起こしている可能性を指摘されました。

(4) 日本線維筋痛症の西岡会長：東京医科大学医学総合研究所所長：

HPV ワクチンには、効果を高める添加物（アジュバント）としてアルミニウムなどが使われており、アジュバントによって、脳内の自己免疫異常がもたらされ、重症の筋肉痛や関節炎、認知障害、睡眠不良などの症状を引き起こす ASIA 症候群が生じていると指摘されました。

(5) 横浜市立大学医学部の横田小児科教授：

幻聴幻影、幻視や性格異常の見られた患者の脳の一部に血流の異常が見られ、精査して「抗 NMDA 受容体脳炎」と診断しました。

(6) フランス病理学者ゲラルデイ氏：

HPV 注射局所の患者の筋肉を顕微鏡で調べたところ、筋膜の間にマクロファージとリンパ球が浸潤していることから、「マクロファージ筋膜炎」が生じたと発表しました。

不随意運動の西洋医学的見解

不随意運動とは、自分の意思によらず、身体の一部が勝手に動いてしまう異常運動のこと。大脳基底核や錐体外路系の機能異常により生じることが多い。

(1) ミオクローヌス

筋攣縮により、身体の一部が突然びくっと動き、体幹全体、四肢顔面のすべてを

含む広範囲に及びます。責任病巣は大脳皮質が主ですが、脳幹、脊髄も稀にあります。

(2) 振戦

リラックスした状態で手指などが細かく震える、動かすと減弱、消失します。主な責任病巣は黒質、視床外側核です。

(3) ジストニア

手足や身体を不規則に捻った姿勢をとる。筋緊張が異常に亢進します。主な責任病巣は被殻です。

(4) 舞踏運動

不規則で目的のない、速く踊るような動き、突然始まり、持続時間は短い。主な責任病巣は尾状核です。

子宮頸癌ワクチンの諸副反応の遠絡的仮説の試み

子宮頸癌ワクチンの諸副反応の患者さん（以下患者さん）は、多彩な症状を愁訴として各病院を受診されましたが、CTやMRIなどを検査しても器質的異常は指摘できませんでした。しかし、脳血流量の低下を指摘された患者さんはいます。

厚労省副反応・痛み研究チーム信州大医学部の池田修一教授は、副反応のある患者さんの皮膚温度が健常者に比べて低いことと、皮膚内神経に「むくみ」が多くみられることから、自律神経の異常により、血流が悪くなっている可能性が高いと発表されています。

漢方医学では、気、血、水の３要素が身体中を常に巡っており、それによって心と身体の健康を守っていると考えられています。気は、体の正常な働きに必要なエネルギー源として体を巡る生命エネルギーのこと。血は血液および血液によってもたらされる栄養分であり、酸素や栄養素を身体の細胞に運びます。水は血液以外の全ての体液（汗、唾液、尿、関節液、リンパ液、髄液など）を表し、老廃物を体外に排泄しながら体に必要な水分のバランスを保ちます。

子宮頸癌ワクチンの諸副反応患者さんが、器質的異常がなく、自律神経の異常により血流が悪くなっているという指摘のもとで遠絡的に考察してみますと、気、血、水、即ちLife flow（ライフフロー）の流れがスムースに行かず、視床、視床下部、脳下垂体の機能に支障をもたらしたか、或はそのバランスが崩れているため、正常な体の制御機構が破綻したと考えられます。

生命を持つものは自然治癒力を備えています。遠絡医療は１本鍼による１万例以上の臨床研究と、東洋医学の古典「易経」の考えを修正し、十二経絡、督脈、任脈、延髄、橋、中脳、間脳の視床、視床下部、脳下垂体、脊髄などのライフフローを自在に調節できる治療法です。

遠絡療法は、ライフフローを調節する治療法です。その医学的原理は：

（Ｉ）東洋医学の原理を応用しています

①子午流注の経絡の気血の流れを利用しています。十二経絡を、十二支の時間に配当しています。例えば、昼３時～５時が膀胱の経絡の気血が一番充実するときなので、膀胱の経絡の病のときは、昼３時～５時の間に治療するとよい。

十二経絡の流れは：肺経→大腸経→胃経→脾経→心経→小腸経→膀胱経→腎経→心包経→三焦経→胆経→肝経→肺経 ..... 遠絡療法はこの流れについて研究を重ね、臓腑通治、表裏、遠絡同名、同名などの手技を用いて、ライフフローを繋ぐことができました。

②陰陽五行を利用しています：
木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生じる。木は燃えて火になり、火が燃えたあとには灰 (土) が生じ、土が集まって山となった場所から鉱物（金）が産出し、金は腐食して水に帰り、水は木を成長させるという五行関係の相生、水は火を消し、火は金を溶かし、金で出来た刃物は木を切り倒し、木は土を押しのけて成長し、土は水の流れをせき止めるという五行関係の相克、そして、遠絡の相輔、補強を更に生かし、ライフフロ―の効果を一層発揮できました。

(Ⅱ) 西洋医学的知識を利用しています：
①視床下部は生命維持の中枢であり、自律神経系の制御でもあります。内臓の働きや、血圧や体温などを無意識下で調節し、ホメオスタシスを維持しています。ホメオスタシスは、自律神経系とホルモン系の連動によって保たれており、視床下部は下垂体との連携で、内分泌系もコントロールしています。

睡眠、覚醒のサイクルは視床下部にあり、生体時計は視交叉上核が司っています。

視床は中枢神経系で最大の神経核であり、感覚、運動情報の中継核として働く視床から大脳皮質への投射線維は視床皮質路があり、内包を上行しています。特に視床の前核群は記憶や情動に関与し、大脳辺縁系における中継核でもあります。

副側核群は小脳や大脳基底核から入力を受け、運動野へ投射します。姿勢を制御するには、大脳皮質から大脳基底核へ、大脳基底核から視床へ、視床から大脳皮質へと戻る情報伝達ループに関与します。
②大脳基底核の異常があると、動作の解離性運動障害が見られ、動作の完了に達する時間がかかります。不随意運動は大脳基底核や錐体外路系の異常により生じることが多い。大脳辺縁系に解離性障害の異常があると、表情、言葉、考え、思考の感情鈍磨の症状が見られます。
③十二脳神経の圧迫症状：

Ⅰ嗅神経：嗅覚異常
Ⅱ視神経：視力
Ⅲ動眼神経、Ⅳ滑車神経
：複視、眼球　運動
Ⅴ三叉神経
：顔の触れない痛み、奥歯の激痛、頬、下顎の激痛
Ⅵ外転神経：眼球外転
Ⅶ顔面神経
：顔面の歪みと突っ張り感、顔面麻痺、dry eye , dry mouth
甘みの異常（舌前 2/3）、眼輪筋麻痺
Ⅷ内耳神経：耳鳴り、めまい
Ⅸ舌咽神経：塩辛味覚異常（舌後 1/3）
Ⅹ迷走神経
：内臓症状、便秘、吐気、胃痛、腹部膨満、血圧、食欲
Ⅺ副神経：肩コリ、頸部後屈困難
Ⅻ舌下神経：舌の偏位

(Ⅲ)遠絡医学の独特な学問（１本鍼による１万例の臨床研究データ）

①陰陽六行を利用しています：

陰陽五行においては、水は木を成長させるという考えは母子関係です。遠絡医学は更に水と土で木を成長させるという親子関係を創生し、君火→相火→水→土→木→金→君火 ..... の陰陽六行を応用し、連接、相輔、補強、相克、牽引瀉法、増流処置の手技を巧みに使用することによって、詰まったライフフローを開通することが可能となりました。

②アインシュタンの相対性理論を応用しています：

人間は生来健康であり、老化にて死んでいきます。身体は虚、低下症へと進行して行きます。例えば、病気の虚による相対的実が発生、副交感神経の低下による相対的交感神経の亢進が現れます。其々の虚症、相対的実症、或は副交感神経低下症による相対的亢進症の身体の状態に応じて、遠絡治療の瀉法、或は補法を選択し、詰まったライフフローの流れを自由自在に調節することが可能です。

③ Atlas, 延髄付近の Life flow が詰まると下位脳の諸症状が発生します：

気血水などの流れの詰まりが Atlas（頸椎１番）の近辺で発生すると、柔らかい視床、視床下部、脳下垂体などに影響し、更に病気が進むと、十二脳神経の圧迫部位の症状も発生することが臨床治療結果から分ってきました。延髄近辺の炎症、腫れなどがあれば、更に髄液の代謝も影響されることにより、上肢の脱力感、下肢の脱力感、感情鈍痲、解離性運動障害などが発生することもわかってきました。

④脊髄レベルと身体の疼痛点の対応関係を突き止めた：

肩の痛みがあれば、肩の部位以外に腰椎、頸椎、胸椎の対応レベルがあり、膝の痛みあれば、腰椎、仙椎、尾椎に対応点がある。このように、頸、腰、肩、膝、足、上肢、下肢に其々の対応レベルがあります。

⑤視床の気、血の詰まり部位、状態における臨床症状を突き止めた：

気、血による Life flow の詰りが視床に波及する場合、飽和度がまだ上がってない視床の下後で蓄積すると、先に手が冷え症となり、視床の上前で蓄積すると足にも冷え症が出ます。Life flow の蓄積の容積飽和度が上昇し始めると、まだ飽和度を超えない視床の上前の蓄積では足の痺れ、下後では手の痺れが発生する。視床の蓄積が閾値を超えると、蓄積から圧迫になり、急に圧力が上がってくる、足が動かせなくなる、その後は手も動かせなくなる。更に、孤束核、疑核, 迷走神経まで圧迫されると、呼吸が苦しくなります。

⑥水（髄液）による Life flow の詰まりが脱力感を発生させる理論：

水（髄液）による Life flow の詰まりが、延髄背側の第４脳室正中口を圧迫すると、髄液が正中口から流出できず、同時に中心管にも流れない。これにより髄液の蓄

積が始まります。

髄液の蓄積は第４脳室→中脳水道→第３脳室→室間孔→側脳室の髄液蓄積へ移行していきます。

「側脳室前角の拡張」→「視床の前側の細胞局所圧迫」→股関節麻痺→下肢の脱力感「側脳室後角の拡張」→「視床の後側の細胞局所圧迫」→肩関節麻痺→上肢の脱力感「側脳室全体の拡張」→「大脳辺縁系の圧迫」→運動性感情障害が発生します。

遠絡療法でLife flowを調節し、HPV副反応がある患者を軽快させた症例

症例１：

和○夏○　女性 19 才、15 才サーバリックス３回接種

主訴：

記憶力低下、睡眠障害、頭痛、生理痛、昼間の眠気、物忘れ

16 才：眠気、頭痛、全身筋肉痛、便秘、下痢、畏光症、記憶力低下

17 才：頭痛、過眠（１日 20 時間）で学校長期欠席

○○呼吸器循環器クリニック

○○クリニック

○○レディースクリニック

こころのホスピタル○○

18 才：○○協同病院

○○メデイカルプラザ脳神経外科

○○睡眠総合クリニック

19 才：○○付属病院小児科

HPV ワクチン関連神経免疫症候群（HANS）と診断

[遠絡的に病態分析]

記憶力低下、物忘れ：

脳に行く血流の低下による。

頭痛：

Atlas から脳へ行く血管の攣縮、或いは拡張した時に頭痛が生じる。

眠気、睡眠障害、畏光症、過眠：

視床、視床下部の症状

生理痛：脳下垂体の症状

便秘、下痢：

延髄の迷走神経の症状

厚労省副反応・痛み研究チーム、信州大学医学部の池田修一教授は、副反応のある患者さんの皮膚温度が健常者に比べて低いことと、皮膚内の神経に「むくみ」が多くみられることから、自律神経の異常により、血流が悪くなっている可能性が高いと指摘した。遠絡的には血流のみではなく、気、血、水等の Life flow の詰まりによる、或は Life flow のバランスの崩れによると考えます。自律神経の失調、ストレスなどにより、副腎ホルモンの分

泌が少なくなり、瞳孔の調節がうまくいかず、畏光症が発生します。ホルモンのアンバランスが脳下垂体へ影響すると、子宮内膜の剥離が乱れ、生理痛が発生します。Atlasから脳へ行くLife flowが少なくなると血管の攣縮、或いは拡張した時に頭痛が生じる。延髄の迷走神経の影響で、便秘、下痢が発生します。海馬、前頭連合葉に影響すると、記憶力低下、物忘れが発生します。一方、入眠や覚醒に関係するホルモン、ドパミンやセロトニンの分泌も乱れ、橋の背内側被蓋野、延髄の網様体の腹内側部と外側部にあるレムオフ・ニューロンの働きも悪くなり、レム睡眠からノンレム睡眠への移行がうまくいかず、視床下部にある視交叉上核の１日の覚醒、睡眠リズムが崩れ、眠気、睡眠障害、過眠が発生します。

症例２：

和○舞○　女性　23才、19才サーバリックス３回接種

主訴：

頭痛、睡眠障害、思考力低下、うつ状態

12才：起立性調節障害、頭痛、生理痛

19才：睡眠障害

20才：頭痛、生理痛が激しくなった

21才：集中力低下、思考力低下

22才：うつ状態

[遠絡的に病態分析]

思考力低下：

脳に行く血流の低下による。

頭痛：

Atlasから脳へ行く血管の攣縮、或いは拡張した時に頭痛が生じる。

眠気、睡眠障害、過眠、うつ状態：

視床、視床下部の症状

生理痛：脳下垂体の症状

患者様は、12才時に起立性調節障害を指摘されています。人は起立すると重力によって血液が下半身に貯留し、その結果、血圧が低下します。健康な人ではこれを防ぐために、交感神経が興奮し、下半身の血管を収縮させ血圧を維持します。また、副交感神経活動が低下し、心臓の拍動が増加して心拍量をあげ、血圧を維持するように働きます。起立性調節障害では、この代償機構が破綻して血圧が低下し、脳血流量や全身への血行が維持されなくなります。

Life flowの影響で、セロトニンが炎症性物質の放出を促進して痛みを誘発する。ノルアドレナリンやセロトニンの低下でうつ状態が発生します。エストロゲン、プロゲステロンのアンバランスで生理不順、生理痛が発生します。高次脳機能に関わる前頭連合葉に影響すると、思考力低下が発生します。入眠や覚醒に関係す

るホルモン、ドパミンやセロトニンの分泌も乱れ、橋の背内側被蓋野、延髄の網様体の腹内側部と外側部にあるレムオフ・ニューロンの働きも悪くなり、レム睡眠からノンレム睡眠への移行がうまく行かず、視床下部にある視交叉上核の１日の覚醒、睡眠リズムが崩れ、眠気、睡眠障害、過眠が発生します。

上記の２名の患者様は、Life flowを調節、治療したことによって、状態が瞬間的に改善しました。現在、患者様は通院中で、症状の維持と回復には継続的治療が必要であります。

HPVワクチン副反応の遠絡的３次元、４次元、５次元の解説

０点は病気のない状態、静止している状態。しかし、０点から01のズレがあると、001(-)の空間が発生、相対的に002(+)の空間が発生します。
01-02の立体的宇宙の空間が成立します。
002から相応的01-yの点線面の(+)の空間が発生します。01-yの空間から因果関係で八卦が発生します。

八卦は３次元で光波、目に見えます。
01-yは４次元で電磁波、目には見えない。
002は５次元の世界です。
001-002は相対関係にあり、002-01-yは相応関係にあります。相対関係と相応関係から相依関係が発生します。

今回のHPVワクチン注射は2013年３月31日の時点で約351万人が注射を受けましたが、副反応のある患者様は約450人、受けた方の全員が発症したわけではありません。

遠絡的に考えると０点から001にズレが発生する原因は、患者さんの特殊体質（目に見える、見えないを含む）、遺伝、思春期のホルモン関係、或は002から01-yの発生は、患者様のまわりの生活状況、ストレス、環境などが関与し、副反応に発症する閾値を低下させたと考えられます。

気、血、水のLife flow（ライフフロー）の流れがスムーズに行かず、視床、視床下部、脳下垂体の機能に支障をもたらしたか、或はそのバランスが崩れたために延髄の迷走神経に影響が及び、迷走神経の機能低下が生じると相対的交感神経の亢進をもたらす。このような状態は前述の信州大学医学部の池田修一教授が指摘する自律神経の異常を来している状態に相当すると考えます。更に、視床下部―下垂体路を構築するニューロンの軸索を通って下垂体門脈系の血管内に放出されるホルモンがうまく分泌されず、正常な体の制御機構が破綻し、免疫機能の撹乱が生じていると推測されます。これは前述の東京医科大学医学部の西岡教授が、ワクチン注射後のアジュバントによる自

己免疫異常を指摘したことに相当すると考えます。

HPV ワクチン副反応の症状は多彩で、その症状は Life flow が影響を与える部位によって症状名、或は病名を考えます。

注射の局所反応として、ワクチンの刺激で発赤、腫脹が現れます。

注射の全身反応として、Life flow が視床、視床下部、に影響を与えると、不眠、過眠、倦怠感等が発生します。視床は中枢神経系の最大の神経核であり、視床皮質路を通って大脳皮質と連絡、更に感覚野や運動野へも投射します。Life flow が視床の後腹側核に影響を与えると、視床症候群が生じて全身筋肉痛を訴えます。脳下垂体に影響を与えると蕁麻疹、発疹、免疫異常、月経異常が発生します。延髄、橋、中脳に影響を与えると、十二脳神経の圧迫症状、例えば、失神寸前は延髄の迷走神経反射によるもので、意識消失は橋の神経細胞圧迫によるものと考えられます。

信州大学医学部の池田教授は、体位性頻脈症候群はウイルス感染が先行しないと起こらない病態であると指摘しました。ウイルスの感染による基底核の破壊、或は Life flow の破綻による低酸素脳症が大脳基底核を損傷すると振戦、 ミオクローヌス、ジストニア、舞踏病などの不随意運動を起こします。

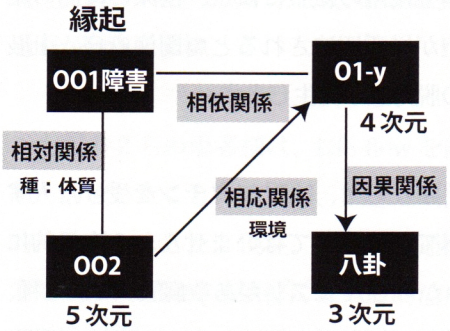
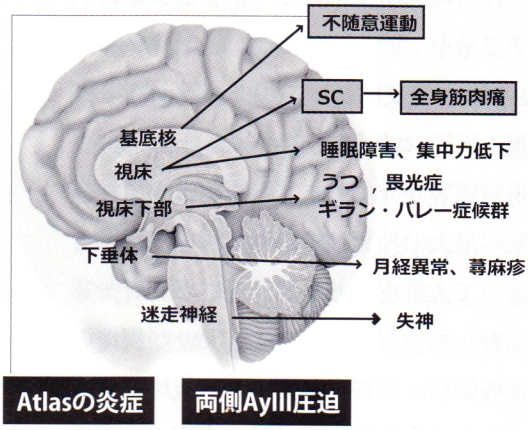
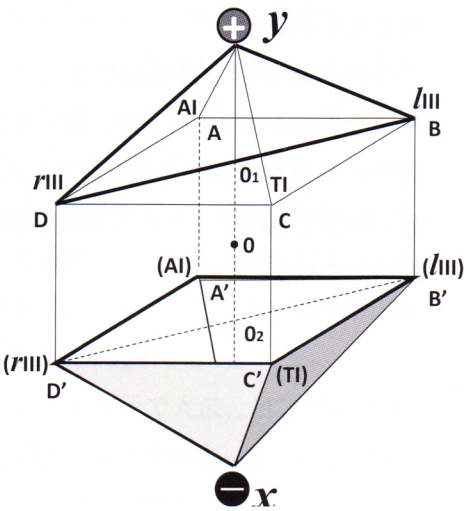
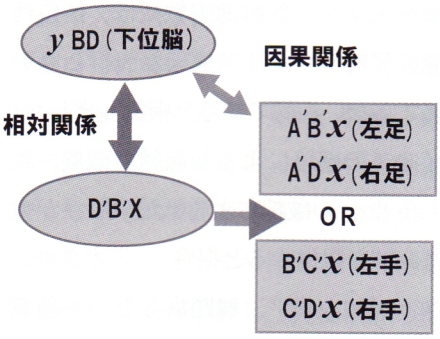
更に、Life flow が延髄の炎症、腫れなどに影響を与えると、髄液の流れがうまく行かず、髄液の蓄積が始まります。髄液の蓄積は第 4 脳室→中脳水道→第 3 脳室→室間孔→側脳室の髄液蓄積へ蓄積していきます。側脳室前角の拡張により、視床の前側の細胞が局所圧迫されると股関節麻痺、下肢の脱力感が発生します。側脳室後角の拡張により、視床の後側の細胞が局所圧迫されると肩関節麻痺、上肢の脱力感が発生します。

副反応は、HPV ワクチンを受けた人すべてに発生してはいません。５次元的に 0 から 001 にズレがある病態、つまり種、遺伝、体質、思春期のホルモンなどの影響、或は 002 から 01-y にズレがある生活環境やストレスなどの影響が、副反応を発症させる閾値を低下させたと推測されます。閾値の低下のもとで、気、血、水の Life flow の渋滞やアンバランスが、脳の各部位に影響を与えて諸症状を発生させたと考えられます。

今回の報告例では遠絡によって Life flow を調節することにより、諸症状を瞬間的に軽快させることが可能でしたが、良い状態を維持するためには継続的治療が必要であると考えます。

HPVワクチン副反応の八卦分析

業障が001のズレを惹起した　001-002の正負の空間の変化が01-yの点線面の空間を惹起



001の変化は002の状態が反応